

報告

20年委員会中間報告（その2）

～今後20年の活動に向けて～

嶺重 慎（京大院理・20年委員会委員長）

1. はじめに

天文教育普及研究会20年委員会（当会の今後20年を考える委員会）では、「今後20年に向けて夢を語る」をテーマに、議論を進めています。以下は、これまで委員から出された意見のまとめ（項目2～8）に、2010年2月28日の関東支部会で出された意見（項目9）を追加したものです。いずれも「意見」で、「決定事項」ではありませんのでご注意ください。これを元に最終報告を作成しますので皆さんからも意見を出してください。

2. 理念・会の進む方向

- ・「我々はどこから来たのか、我々は何者か、我々はどこへゆくのか」という問いかけに、科学的に答えることが天文学の課題である。
- ・われわれの使命は科学的な世界観を一般の人に伝える、理解してもらい、共有すること。
- ・（難しいことはさておき）多くの人と、宇宙を知り、宇宙を学ぶ喜びを共有したい。
- ・天文のトピックスを発信する場というよりは、教育・普及にどのようにいかせるかを検討し、実践にいかせる形に咀嚼する場であるべき。すなわち、＜研究者等＞ ＜プラネ館（天文施設）＞ ＜ちまたすむ人々＞。
- ・本会は、「天文教育普及活動をする人たちのあつまり」だけでなく、「天文教育普及活動をする人たちをサポートするあつまり」にもなるべき。

3. リソースの収集・蓄積、広報（発信）、会員の自己実現

- ・各地で行われているハイレベルかつ多岐にわたる普及活動を蓄積する。

→Webに集める？「天文教育会館」の設立？

- ・PAONETは情報・蓄積の手段であった。もっとやれるはず。

- ・一般の人に本会の存在がどれだけ知られているか？もっとWebや会誌を使った広報が必要。

- ・（本会の存在を知らない人が）いきなり本会のHPにアクセスしたりはしない。

→国立天文台HPにリンクをはってもらい、天文台と活動分担してアピールしていくのはどうか。

- ・例えば、観望会でも、講演会でも、（一応、受入体制はあるものの）どれだけリクエストが来ているのか？ まだまだ不足。（IYA事務局には多くのリクエストが来ていた。）

- ・広く活動を知ってもらうことは、教育・普及に携わる人の認知度・立場の向上につながる。

- ・それには、資金も必要。寄付金口座（特別会計）も必要か？

- ・レポート・論文集を出版！（紙バージョンのみならず電子出版も。）

4. 他の組織・団体との連携

- ・本会とJPA（日本プラネタリウム協議会）、JAPOS（日本公開天文台協会）、Astro-HS（高校生天体観測ネットワーク）、天文学会では、メンバーや活動に重なりが多い。共通の土台をもつとよい（どのような土台？）。一本化できれば世間に対してよりわかりやすい天文普及団体になるかもしれない。

・JPA、JAPOSは施設と業者の会。一方、天文学会や本会は個人の会。連携は有用だが「統合」は無理。

・IYAにおいては、これらの団体が一堂に会してイベントや議論を行った。

・ポストIYA活動について議論が進行中。「連絡協議会」をつくって、IYAの連携の枠組みを継続しようという議論が出ている。これに本会がどう関わるか

→相互交流を行える「ハブ」的役割を本会が担うべきではないか。

・天文学会でも、「天文教育委員会」を「天文教育普及委員会」に組織替えして天文普及に本格的にとりくむべきという提言が（海部さんから）出ており、議論中である。

・アマチュア（観望会グループなど）との連携は、まとまった組織がないこともあり手薄。一方、IYAでは「公認」のお墨付きをもらったことがアマチュアの活動にプラスになったと聞いている。

5. 国際協力

・APRIMやEAMAなどの会議で、本会が日本代表として日本の活動を報告する機会も増えてきた。

・ぐんま天文台や美星天文台では、人の交流（訓練）や合同研究会を開いている。が、今後は財政難から難しいという見方もある。

・IYA活動、例えば、「アジアの星」は、国際連携のありかたに関して、新しい可能性を切り拓いた。

・日本天文学会は、東アジア（韓国、中国、台湾）と年會を合同開催すべく、検討に入りつつある。その年會には「教育セッション」も含まれる。

・英語（や中国語、韓国語）のHPも必要。

6. 学校教育・一般普及分野の活動について （提案）

・学校教育分野の活動：

小中学校での天文教育への支援のため、例えば、「学校教育支援委員会」を設け、天文分野の指導例・実践例等の「情報提供」をし「天体観望会開催」の支援をする（WGで既に始めている活動）。

・一般普及分野の活動：

各地で開かれている天体観望会への支援のため、例えば、「天文教室支援委員会」を設け、観望会等を開いている同好会等や天文学会の講師派遣制度と連携する。

7. 「研究会」から「学会」への可能性

・これまで、「教育／普及」についての議論が先行し、「研究会／学会」の議論はあまり表には出てこなかった。

・もう少し「天文教育（学）」に迫る、学術的な活動も目指すべきである。

・これまでの議論の経緯をふまえると、現時点で「天文教育学会」という案が広く支持されるとは考えにくい。「天文教育普及学会」ならあり得るか？

・本会の名称は、年會の名称「天文教育研究会」と紛らわしい。また、「**研究会」では、一般に、同好会的で、学会的な組織と認識されない。

・対外的には「学会」となってくれた方が活動しやすい（例えば、財団への助成金申請において）。

・「学会」となると、「敷居が高い」という人はどれくらいいるだろうか？

・ある組織が「学会」となるための条件（法律の定め）はなさそうだ。

・「学会」にふさわしい中身があるのか？（「天文教育（普及）学」の追究がどれだけなされているのか、専門論文がどれだけあるのか？天文外も含め、教育関係者のコンセンサスがあるのか？）

8. その他

- ・「ベテラン」会員に、じっくり時間をかけて行う仕事や経験が必要な業務についてもらう（事務局？）。
- ・海外研修や海外の研究会出席のため、若手派遣制度が欲しい（天文学会の「早川基金」は、教育は対象外）。
- ・活動の「評価」も必要（今、「外部」評価はほとんどなされていない）。

9. 関東支部会で出された意見（抜粋）

- ・名称として「天文教育普及研究会」は長すぎる。「天文教育研究会」に縮めるべき。かつて「普及」をはずそうと提案したら反対された経緯がある。
- ・日本学術会議においてこの会は「学会」になっている。実態として「学会」として認知されていれば名称を変える必要はないのではないか。
- ・名称を「学会」としてしまったら敷居が高くなるのではないか。名称を変える必要はない。
- ・この会の初期の頃から入会していたが、時々会が変な方向に向かったときがあった。（具体的には学校の教員のための会になってしまった時期があった。）草の根的にやっている立場からすると、退会したくなった。会の今後を考えるなら、アンケートをとるなりして、草の根的にやっている会員からの意見も拾い上げてほしい。
- ・身近な活動、たとえば、観望会をやるといったときに、どこに頼めばよいかわからないといった問題があるが、三鷹市ではそれができている。
- ・「学会」か「研究会」という名称の議論から入るのではなく、そのような会の構造的な部分の議論をしっかりとしていけば、名称はあとから自然に決まってくるのではないか。

- ・学校教育への支援が必要。特に小学校教員への支援が必要だが、この会に小学校教員の参加が少ない。それは、小学校教員が必要とする資源がこの会にあまりないからかも知れない。
- ・この会のゴール（目標）をどこに設定するかが大事では。宇宙を知ることにつくられる科学的世界観をつくることを支援することがこの会の本義では。高い理想をもってそこへ至るロードマップを明確にして進んでいくことが大事なのではないか。

嶺重 慎